

## 溺れゆく前に

弘前市立第二中学校

奈良岡 真里奈

対象作品／汐見夏衛著『さよなら嘘つき人魚姫』一迅社

この本を知ったのは、約一年前でした。

学校には、廊下に本の紹介をしたポスターがいくつか掲示されていて、偶然にもこの本を紹介するポスターに目が留まり、本文から抜粋された「一人魚姫は、もう、おしまい」という言葉に興味を持ちました。

偶然出会ったこの本は、私の考えを変えていき、読み進めていくほどこの本の題名はストーリーにびつたりだと感じました。この本、『さよなら嘘つき人魚姫』は、私のとても大切で大好きな本になりました。

この『さよなら嘘つき人魚姫』は、「嘘つきかまってちゃん」の綾瀬水月と、誰ともつるまず誰とも話さない「変人」の羽澄想の二人の視点でストーリーが進んでいきます。

二人には、他の人に知られたくない悩みがありました。もちろん、誰にも相談せず隠し続けている二人は、悩みを隠すための性格、「嘘つきかまってちゃん」や「変人」を演じ続けてしまっただけのために、どこにも居場所がなくなってしまう

ます。学校の悩みなら家で休んだり、転校したり、とできますが、二人の悩みは家の、しかも唯一の同居人の母親のことでした。

そんな二人が同じ時を過ごせば過ごすほど、二人の母親の束縛は厳しさを増していきました。限界まで追いつめられ、逃げようとしても失敗に終わり、すべての光を見失った二人は、観光スポーツであり自殺スポーツでもある「涙岬」で自殺を試みます。けれども、互いの「生きてほしい」という思いが伝わり、二人は生きる理由を見つけ、危機一髪のところまで助かりました。その大きな出来事もあり、二人は束縛されない自分のための人生を歩むことに成功し、嘘つきのこれまでの自分がそれを告げることができました。この本は、孤独な二人がそれぞれの悩みに立ち向かうまでの苦しく、そして切ない恋の物語です。

私はこの『さよなら嘘つき人魚姫』の本文最後の行を読んだ直後、自分自身も他の人に知られたくない悩みがあること、

そして今の社会では周りの人に馴染むためには、自分の考えや悩みを隠さざるを得ないということに気付かされました。

特に後者は、綾瀬のような相手に不快に思われたくない自分を守るための嘘や、羽澄のような兄を亡くした悲しみを思い出させたくない母親を守るための嘘など、人によつて違う複雑な悩みと嘘があり、簡単に「助けたい」と決意するだけでは誰も助けられないどころか、悩みを抱えていることにすら気付けないことがわかります。では、どうすれば綾瀬と羽澄の二人の悩みを自殺未遂が起る前に解決できたのでしょうか？

本文では、綾瀬は羽澄に、羽澄は綾瀬に、足首と重石をくりつけたロープを切りはなし、「生きてほしい」という思いを互いに伝えることで「生きていたい」と思えるようになつていきましたが、その出来事が起こるまで先生や互いにもそれぞれの悩みを打ち明けていませんでした。羽澄の視点の文章でも、「大人に頼るつて発想がまるでなかつたです。」や、「今思えば、飛び込んだりしてしまふ前に、初めから彼女とたくさん話しておけばよかったのだ。」というように、相談という手段が頭になく、一人で悩みを解決しようとしていたことが読み取れます。しかも「主力で気づかれないようにしていた」ともあり、助ける側は一切、悩みについて触れない状況でした。こればかりは本人が意思表示をしなけれ

ば何も始まらないと思います。二人は悩みに無理矢理蓋をしていました。私はずっとどうすればよいか考えていましたが、やはり苦しいことは信頼できる人に本人が相談するしかない、という結論に至りました。私は、まだこの世界では気軽に悩みを打ち明けられないこと、そして私自身もそんな世界を変えようと動けておらず、未だ誰が何の悩みを抱えているのかわからない現実、かなりショックを受けました。

この世界は生きづらいです。それは私でも、誰でも少しは感じていると思います。その生きづらさは人によつて違います。あたり前のことですが、生きづらさは人によつて違います。重い人は可哀想、軽い人は大したことない、ということとは絶対ありません。

例えば、海まで続く何本かの道のうち一本に、誰かが砂浜の近くに、私がそこから少し離れたところにいるとします。道はたくさんあるのに、その人の悩みで霞がかかり、一本しか見えていません。でも私は、その人をこちらに呼ぶことができます。船を用意できます。かけ寄つて、砂浜で一緒にいることができます。霞を晴らす以外にも、方法はいくらでもあります。その人が、大切な人が海で溺れてしまふ前に、手を差し伸べる。それだけで生きる理由になる、と私は信じています。